

日本語の副詞モウ、マダの多義と尺度構造

宮田 瑞穂

要旨

本稿の目的は、日本語の副詞のモウとマダの多岐にわたる用法の派生過程を分析することである。モウとマダは時間にかかわる用法のほかに、数量詞と共起する用法や、形容詞と共に用いられる用法がある。本稿ではそれらの用法の背後にある基本的意味として、モウとマダの焦点化部の導入する尺度を参照し、構築される尺度構造を想定する。その上で、本稿ではモウが非タ形と共起する場合の意味や、評価・感情を表すモウの意味など、モウとマダの各用法について解決されていない問題が、尺度構造を想定することによって解決されることを示す。

キーワード：日本語，副詞，モウ，マダ，焦点，尺度構造

1. はじめに

日本語の副詞であるモウおよびマダは、先行研究では主に「時の副詞」に分類される(中右 1980: 165、仁田 2002: 255–258)。しかしながら、モウとマダには、時にかかわる用法だけではなく、様々な用法があることが指摘されている。そのため、本稿では、モウとマダの多岐にわたる用法を、両副詞が尺度構造を導入する副詞であると想定することによって統一的に捉えることができることを示す。

2. 先行研究: モウとマダの用法

2.1 モウとマダの用法に関する記述

先行研究(森田 1989: 1127–1129、飛田・浅田 1994: 497–499, 536–538、池田 1999, 2000、金水 2000: 76–82、渡辺 2002: 135–158)の記述を整理すると、モウ、およびマダには以下の用法がある。

- (1) 時間にかかわる用法
 - a. 電気はもう消えている。
 - b. 電気はまだついている。

- (2) 数量詞と共起する用法
 - a. 練習のために、太郎はもう2時間歌う。
 - b. 練習のために、太郎はまだ2時間歌う。
- (3) モウ: 話し手の評価・感情を表す用法¹
 - a. あいつのことがもう憎くて憎くて…。
 - b. おまえってやつは、もう。
- (4) マダ: 比較構文と共起する用法

太郎は次郎よりまだ背が高い。

それぞれの用法について、先行研究の記述をまとめる。(1)の時間にかかわる用法は、時間軸に沿った変化を表す用法である。この用法では、モウは変化後であることを表し、マダは変化前を表す。また、モウとマダは、数量詞と共起し、イベントの達成までの必要量を表す用法を持つ(池田 2000)。

次に、モウは(3a)のように述語部が表す感情・評価がコントロールの限界を超えていることを表す(渡辺 2002: 114)という用法がある。また、(3b)に示すように、モウが単独で用いられる感動詞に近い用法がある(全 2015: 31-41、裴 2017)。

最後に、(4)のように、マダは比較構文と共起することができる。その場合、マダは「事柄(A)が基準点に達していないため、不十分、不満足な状態であるが、他(B)と比較すればこの方が基準点に近い(森田 1989: 1128)」ことを表すとされる。

2.2 個別用法に関する問題

モウとマダの個別用法に関しては多くの議論がなされているが、残されている問題もある。まず、時間にかかわる用法に関するモウの問題を見る。この用法において、モウは変化後を表すため、基本的には(1a)のように結果を表すテイル形や、完了を表すタ形と共起する。しかしながら、モウは、未完了を表す動詞の非タ形と共起することもできる(Jacobsen 1983、池田 2000)。モウが非タ形と共起する場合を詳細に分析している先行研究に、Jacobsen (1983)がある。Jacobsenは、モウとマダによって表される意味を変化時(time of change) t_c と、参照時(time of reference) t_r の順序付けによって捉える。Jacobsen (1983: 123)が挙げるモウとマダの定義を(5)に示す。

- (5) a. mada: For all t ($t \leq t_r$): $Q[t]$
- b. moo: For some t_c : (For all t ($t < t_c$): $\sim Q[t]$) AND (For all t ($t_c < t \leq t_r$): $Q[t]$)²

(6a)のようにタ形とモウが共起する場合、タ形が示す参照時 t_r が泳ぎを終えた時 t_c に後続することを表す。一方、(6b)の場合は、参照時と変化時の逆転が起こる。

- (6) a. もう泳いだ。→ $t_c > t_r$
 b. もう泳ぐからまた後で話そう。→ $t_c < t_r$
 (Jacobsen 1998: 127) (原文はローマ字)

(6) の逆転現象について、Jacobsen (1983: 129) は、“[T]he relative order of t_c and t_r cannot be specified in general for *moou*, but is rather determined by the sense of the predicate.” と主張している。しかしながら、このような主張は、(5b) の定義と整合性を保っていない。よって、モウが未完了を表す非タ形と共起する場合をどのように分析に取り込むか、という点が重要な問題である。

次に、数量詞と共起する場合に関する問題を述べる。数量詞と共起するモウとマダの特徴として、(7) と (8) に見られるように、モウは数量詞を削除すると元の文と意味が変わってしまうのに対し、マダにはそのような意味の変化が見られないという点が挙げられる (池田 2000: 52、金水 2000: 81–82)。

- (7) a. 水がもう少し足りない。
 b. ??水がもう足りない。
 (8) a. 水がまだ少し足りない。
 b. 水がまだ足りない。 (池田 2000: 52)

この対立に関して、池田 (2000: 52) は、次のような分析を提示する。モウは基本的に、継続していた状態を打ち切るという意味を担う。動作性述語文に出現するモウの場合は、継続を打ち切る手段が述語の動詞によって表されるため、モウの後に数量を表す語を特に必要としない。一方、状態性述語文に出現するモウの場合は、状態継続を打ち切る手段を動詞で表すことができず、打ち切りまでの量を表す数量詞が必須となる。対して、マダの場合は、状態継続の維持を表すため、数や量を表す語は単なる追加情報であり、削除しても意図した意味から大きく離れることはない。

池田のマダに対する記述には同意するものの、モウの記述には問題がある。(2) に示したように、「歌う」という動作性述語文の場合も、数量詞を削除すると意図した意味では容認されない。そのため、数量詞が削除できるかどうかと、述語の性質は相関しない。よって、モウが数量詞と共起する場合について、さらに分析が必要である。

次に、評価・感情を表すモウに関する問題を見る。渡辺 (2002: 114) は、このようなモウは、「[感情] をコントロール内にとどめるにも限界点があって、その限界はすでに超えている」と記述している。この記述に関して、感情の限界点とは何かという問題がある。ある感情の限界点を越えた場合、話者や対象は変わらずその感情を持ち続けている

のか、もはやその感情ではない別の感情を持つのかということが定かではない。また、モウは、(9)のように段階性を持たない形容詞「完璧だ」とも共起できる³。

(9) 所々破けてる黒のシャツって、もう完璧。 (剛しいら『Baby boys』)

段階性を持たない形容詞の場合、段階性がないがゆえにその程度の「限界点」もない。よって、このようなモウについて、限界を超えていることを表すという記述では不適切である。

Jacobsen (1988: 141) は、モウとマダの定義として (5) を示しながら、評価・感情を表すモウと比較構文と共起するマダは、時間的前後関係ではなく、主観的な「心理的スペース (psychological space)」上の変化や継続を表すという分析を行っている。このような分析では、Jacobsen が (6) で挙げる、*t*₁ が心理スペース上のどのような点に対応するのかという点が明らかではないという問題がある。

3. モウとマダの基本的意味の想定

2.2 節において、先行研究におけるモウとマダの各用法の記述の問題点について述べた。このような問題が散見されるのは、データの検証が不十分であるという要因もあるだろうが、根本的な要因として、各用法に共通するモウとマダの基本的意味の設定が不十分であることが挙げられる。各用法に共通する意味特徴として、先行研究では「状態の移行」(池田 1999: 23) や「段階の推移」(金水 2000: 76) などの記述がなされている。モウとマダの時間にかかわる用法を見ると、そのような意味特徴がかかわっているのも事実である。一方で、2.2 節で見たように、モウの未実現用法や、数量詞と共起するモウとマダおよび評価・感情を表すモウなど、「状態の移行」や「段階の推移」では説明しにくい用法があり、それらを統一的に捉えようと試みる Jacobsen (1989) や池田 (2000) の論も問題点が多い。

このことから、本稿はモウとマダは、被修飾部によって導入される何らかの尺度を参照する副詞であると主張する⁴。ここで、「尺度」とは、何らかの順序で要素が並ぶ、つまり線形順序を構成する集合を想定する (cf. Löbner 1987: 65, Löbner 1989: 167)。例として、イベントの順序として捉えられる時間尺度や、数・量の尺度、形容詞の構成する尺度などが挙げられる。モウとマダは被修飾部を焦点化し、その焦点化部が導入する尺度をもとに、新たな尺度構造を構築し、その尺度構造を文解釈における前提として導入する。

モウとマダが導入する新たな尺度構造とは、焦点化部が導入する尺度をなす集合を、焦点化部が言語化する A と、A 以前、もしくは A 以後の集合 $\{x | x = \text{not-A}\}$ に分割することによって構築される⁵。焦点化によって、焦点化部以外の集合が導入されるという想定

は、Rooth (1992) が論じる焦点意味論に則る。例として、「太郎はもう 10 歳だ。」という場合であれば、モウは焦点化部「10 歳」が導入する年齢尺度を「10 歳」と、「10 歳でない年齢」に分割する。そのうえで、分割した集合と、モウとマダを含んだ文の真偽を評価する評価点 (evaluate point: p_e) を順序付ける。その順序付けした新たな尺度を、文解釈の前提として導入する。それぞれの主張と前提を定式化したものが (10)、(11) であり、図式化したものが図 1 である。本稿では、マダが持つ「その状況がいずれ変化する」という含みは、尺度含意であると考え。なぜなら、(12) に示すように、その含みは打ち消すことができるためである。よって、移行点以後の not-A の段階は文脈によっては想定されないということを表すため、図 1 では点線で示した。また、図 1 では、焦点化部が導入する尺度を二分する境界を、移行点 p_0 として示した。

(10) モウ

主張: $A(p_e)$ / 前提: $\text{not-}A(p) \ \& \ p < p_e$

(11) マダ

主張: $A(p_e)$ / 前提: $A(p) \ \& \ p < p_e$ / 尺度含意: $\text{not-}A(p') \ \& \ p_e < p'$

(12) 太郎はまだ東京に住んでいる。もともと、太郎にこれから引っ越す予定もないが。

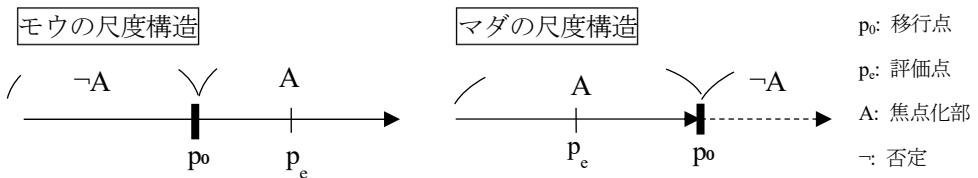


図 1 モウとマダの構築する尺度構造

モウとマダが、何らかの尺度を参照すると想定する利点は 2 つある。1 つは、参照する尺度を時間尺度以外にも許容することで、時間的な変化を想定せずとも、モウとマダの用法を捉えられるという点である。よって、2.2 節で挙げた、各用法における問題を解決することができる。先行研究において時間的な変化をもとにモウとマダの用法を捉えようとするのは、時間にかかわる用法からの派生として他の用法を説明しようとする傾向に起因している。一方で、本稿の提示するモデルでは、モウとマダの基本的意味を抽象的なレベルに置くことで、それぞれの用法をより適切に捉えることができる。

利点の 2 つ目は、モウとマダの対照性と類似性を捉えることができることである。モウとマダは、先行研究で指摘される通り、「変化後」と「変化前」という対照性を持つ。一方で、数量詞を修飾する用法のように、モウとマダがほぼ同じ状況を表す類似性を持つ。このような特徴は、モウを「変化後」、マダを「変化前」と記述するだけでは捉えき

れない。モウとマダがある尺度を参照し、(10)、(11)のような主張と前提を持つとすることで、モウとマダは主張としては同じ状況を表すということを捉えられる。

以上の尺度構造を踏まえて、4 節から、モウとマダのそれぞれの用法についての具体的な分析を提示する。

4. 時間にかかわる用法

4 節では時間にかかわる用法について記述する。この用法では、モウ、およびマダは動詞句を焦点化する。そのため、モウとマダが参照する尺度は時間軸に沿ったイベントの集合である時間尺度である。焦点化された動詞句は、テンス、およびアスペクトの情報を含む。そのため、評価点、および移行点は、動詞の文末形式が持つテンス情報 (temporal information: TI)、およびアスペクト情報 (aspectual information: AI) に対応する。それぞれの点は時間軸のある時点を表すため、 t_e 、 t_o と表す。本稿では、動詞のテンス情報は、Reichenbach (1947) に基づき、発話時 S、出来事時 E、参照時 R の順序付けで表す。また、動詞のアスペクトは、金水 (2000: 16-17) に従い、出来事 (event) の開始と終了によって区分される、予期相、進行相、結果相の3つの局面があるとする⁶。

初めに、結果を表すテイル形とモウ、およびマダが共起する場合を見る。例を (13) に再掲する。

- (13) a. 電気がもう消えている。
b. 電気がまだついている。

この時、テイルが表すテンス情報は「E-S,R」⁷であり、アスペクト情報は結果相である。そして、モウ、およびマダの尺度構造における移行点は、それぞれ「消える」、「つく」という出来事が起こっている出来事時 E に対応する。その上で、(13a) のモウの場合は、「つく」というイベント後の段階である結果相に参照時 R が位置することを表す。(13b) のマダの場合、「消える」というイベントの結果相に参照時 R が位置することを表す。よって、マダは「つく」というイベントの結果状態が現在まで続いているということを表す。また、マダの場合は、尺度構造が持つ「いずれその状態が変化する」という尺度含意によって、「つく」というイベントの結果状態がいずれ終了するという含意が生まれる。結果状態の終了とは、時間軸において新たなイベントが開始するという意味する。ここでは、「電気が消える」というイベントによって、「つく」というイベントの結果状態が終了すると想定する。以上の点を尺度構造を用いて図示すると図2と図3と

なる。

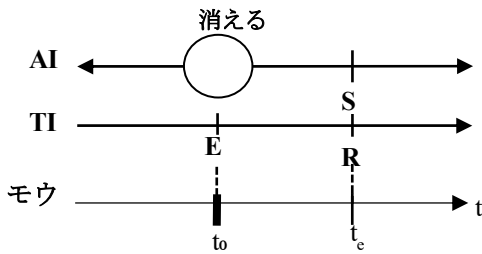


図 2 もう電気が消えている。

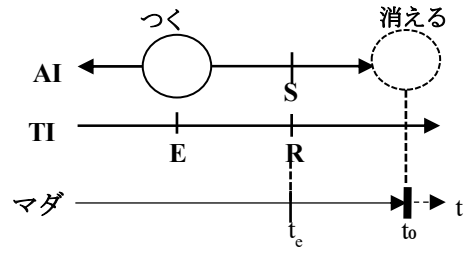


図 3 まだ電気がついている。

次に、モウが動詞の非タ形と共起する場合を考える。モウが動詞の非タ形と共起する場合、テンス情報は「S,R-E」であり、アスペクト情報は予期相である。仲本 (2008: 102) によると、予期相は均質な状態ではなく、事態の成立まで余裕のある状態である遠局面と、事態が目の前に差し迫った状態である近局面に二分される。このことを踏まえて、モウの移行点 t_0 は、予期相における遠局面から近局面への移行点を導入すると考える。よって、評価点 t_e は予期相の近局面に位置する参照時に対応する。この分析によって、モウが非タ形と共起する場合は、「あるイベントが起こる寸前である」という含みがあることを捉えられる。図示すると図 4 となる。

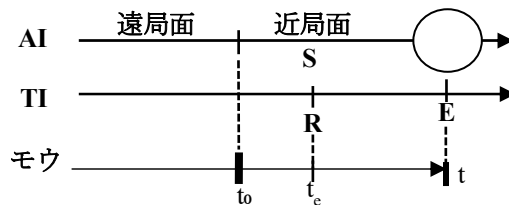


図 4 モウと非タ形の共起における尺度構造

この分析によって、2.2 節で挙げた、Jacobsen (1983) の問題を解決できる。Jacobsen の分析の問題は、非タ形とモウの共起において、移行点を出来事時 E と一致すると分析したことにより、評価時 (Jacobsen の言う参照時 t_r) と、移行点 (Jacobsen の言う変化時 t_c) の順序が、他の用法と異なり逆転してしまうという点であった。しかし本稿の提出する分析では、モウが非タ形と共起する場合の t_0 と t_e の順序を、他のテンス・アスペクト辞とモウが共起する場合と同一に保つことができる。

また、非タ形と共起するモウが近局面への移行を表すという分析は、モウと起動までの時間量を表す副詞 (仁田 2002: 246-258) の共起制限も捉えることができる。(14) に見られるように、モウは起動までの時間量が少ないことを表す僅少所要型副詞の「すぐ」と共起することはできるが、起動までの時間量が高いことを表す長期所要型副詞の「や

つと」とは共起し難い。これは、図4に示したように、モウが予期相の近局面に評価点を位置付けるからであると考えられる。

- (14) a. 太郎はもうすぐ来る。 【僅少所要型】
b. ?太郎はもうしばらく（で）来る。 【中期所要型】
c. ??太郎はもうやっと来る。 【長期所要型】

5. 数量詞と共起する用法

5節では、モウとマダが数量詞と共起する用法について分析する。2.2節において、モウとマダはどちらも数量詞と共起することができるが、モウは数量詞を削除すると容認されないのに対し、マダはそうではないことを述べた。例を(15)、(16)に再掲する。

- (15) a. 練習のために、太郎はもう2時間歌う。
b. ??練習のために、太郎はもう ϕ 歌う。
(16) a. 練習のために、太郎はまだ2時間歌う。
b. 練習のために、太郎はまだ ϕ 歌う。

この点に関して、数量詞と共起する用法におけるモウ、マダの焦点化部を明らかにする必要がある。そのため、数量詞に関する構成素テストを行っている Kawashima (1998)、佐藤 (2004) を基に、いくつかのテストを行う。

第一に、疑似分裂文による焦点化が可能であるか否か (Kawashima 1998: 3) という点について検証する。疑似分裂文による焦点化が可能な要素は、統語的構成素であると考えられている。(15a)、(16a)を疑似分裂文化したものが、(17)である。

- (17) a. 練習のために、太郎が {?歌うの / 歌う時間} は、もう2時間だ。
b. ??練習のために、太郎が {歌うの / 歌う時間} は、まだ2時間だ。

結果として、マダを含む(17b)は不自然な文となる。

第二に、「しか」の焦点要素になれるかどうか (佐藤 2004: 19) という点について検証する。「しか」の焦点要素は、統語的構成素でなければならないとされる。テストの結果が(18)である。

- (18) a. 練習のために、太郎はもう2時間しか歌わない。
b. ??練習のために、太郎はまだ2時間しか歌わない。

モウと数量詞の連鎖は「しか」の焦点要素になれるのに対し、マダと数量詞の連鎖を「しか」の焦点要素にすると不自然となる。(17)、(18) から、モウと数量詞の連鎖は構成素を成すが、マダと数量詞の連鎖は構成素を成さないということがわかる⁸。このことから、モウは数量詞を焦点化しており、マダは時間にかかわる用法と同じく動詞句を焦点化すると考えられる。

これまでの検証を踏まえて、数量詞と共起するモウについて分析する。モウが参照する尺度は、数量詞が表す尺度である。数量詞が表す尺度は、蔡 (2017:22) に従い、単位に区切られた、0 を極点とする尺度であるとする。蔡によれば、数量詞は尺度における幅を表し、文脈によって ① 0 を起点とした幅、および ② 0 とは異なる起点からの幅、という 2 つの幅を表す。このことを踏まえて、モウが数量詞を焦点化することによって表される意味を考える。(19) の対比を見る。

- (19) a. 練習のために、太郎は2時間歌う。
- b. 練習のために、太郎はもう2時間歌う。

(19a) の場合は、「練習のためにこれから2時間歌う」という解釈と、「すでに歌い始めているが、追加で2時間歌う」という解釈が可能である。一方、(19b) の場合は、「すでに歌い始めているが、追加で2時間歌う」という解釈のみが可能となる。そのため、(19a) の「2時間」は、上記で述べた①と②のどちらの幅も表せるのに対し、(19b) の「2時間」は、必ず②の0以外の起点からの幅を表す。

モウが数量詞を修飾することで、必ず0以外の点が始点となるのは、モウの尺度構造に起因する。モウの導入する「not-A(p) & p < p_e」という前提によって、文中の数量詞の表す幅とは異なる幅が以前にあることが意味される。このことによって、評価点からイベント終了までの幅は、0以外の点を始点とする幅になる。評価点は数量詞Aの表す幅の始点に対応するため、数量詞と共起する用法では、not-AとAの境界に位置する移行点と評価点と同じ位置となる。このことを図示すると図5のようになる。図5では、モウの移行点、および評価点は数量詞の表す尺度上の点となるため、 n_e 、 n_0 とした。

対して、上で検証したように、マダと数量詞が共起する場合、マダは動詞句を焦点化する。そのため、移行点、評価点の関係は、時間にかかわる用法と同一である。数量詞は発話時から、マダの移行点までの幅を具体的に数値化するものと考えられる。これを図示すると、図6のようになる。

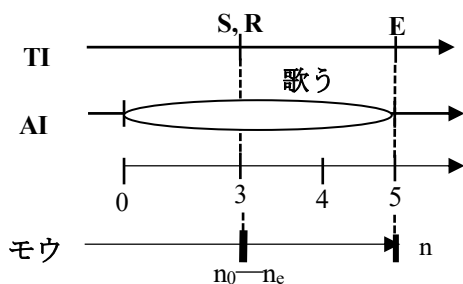


図5 モウと数量詞が共起する用法

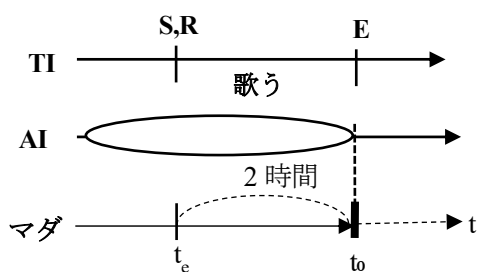


図6 マダと数量詞が共起する用法

モウとマダのどちらの場合も数量詞はイベント終了までの幅を表す。そのためモウとマダは同じ状況下で用いることができる。一方で、マダは時間尺度を参照するのに対し、モウは数量詞尺度を参照する。これにより、(15)、(16) で挙げた、数量詞を削除できるかどうかという違いが生まれる。

6. 評価・感情を表すモウ

次に評価・感情を表すモウについて分析する。初めに、モウが被修飾部を持つ (20) について述べる。

(20) あいつのことがもう憎くて憎くて…。

この用法の問題点は(21)のようにモウが段階性を持たない形容詞とも共起できるため、「感情の限界点を超える」(渡辺 2002: 144) という記述が不正確という点であった。

(21) 所々破けてる黒のシャツって、もう完璧。

(20)、(21) のモウは、評価・感情の甚だしさを表すということが先行研究で指摘されている(飛田・浅田 1994: 538、渡辺 2002: 144)。このようなモウは、時間にかかわる用法とは異なり、時間的な変化を表すわけではない。例として、(20) は、「あいつ」に対する評価が「憎くない」から「憎い」へ時間と共に変化したことを表すのではなく、「憎い」評価を強調する効果を持つ。

強調と関連して、Rooth (1992: 79-81) は焦点の効果の1つとして、対照性 (contrast) を挙げている。焦点化によって、オルタナティブが想起されることにより、オルタナティブと焦点要素が対照的に解釈される。この対照性が、モウの強調効果にかかわると考えられる。すなわち、モウによって述語部が焦点化されることによって、焦点化部のオルタナティブ not-A が想起され、not-A と述語部が対照的に解釈される。これにより、述

語部が「not-A ではなく A である」として強調される。

次に、モウが単独で用いられる場合について述べる。先行研究(全 2015:20、小出 2017:6、裴 2017:124)では、モウが単独で用いられる場合、(22a)のように、マイナスの評価を表すとされる。一方で、(23)のように、モウが単独で用いられ、プラスの評価を表す用例もみられる⁹。

(22) (何度も同じ失敗をする人に対して) おまえってやつは、もう。

(23) A: ここのレストラン、料理が最高でしょう？

B: ええ、それはもう！

(24) # (おいしい料理を食べて) この料理、それはもう！

(22) と (23) は、モウが単独で用いられているという点は共通するが、大きな相違点がある。それは、(22) のようにマイナスの評価を表すモウは、前文脈がなくとも使用できるのに対し、(23) のようなモウは、(24) に示すように A の問いかけという前文脈がないと不自然となる。つまり、(22) はモウ単独でマイナスの評価を表す語として機能するのにに対し、(23) は述語である「最高だ」が省略された結果、モウが単独で現れているのである。本稿では、(22) のように、前文脈がなく単独で用いることができるモウに限って分析を行う。

モウが単独で用いられるのは、モウの被修飾部、たとえば (22) の場合は「手に負えない」や、「呆れた奴だ」などが、モウそのものに語彙化されるようになった結果だと考えられる。よって、マイナスの評価を強調するという点では、(20)、(21) のモウと同じ分析によって捉えられる。しかしながら、形容詞が明示されている場合、モウは「完璧だ」というプラスの評価を表す語でも、「憎い」というマイナスの評価を表す語でも修飾することができる。対して、文中で単独で用いられる場合は、マイナスの評価を表すことしかできない。

この点は、マイナスな評価を与える表現を行う場合に、「オフ・レコード」発話として表現するという、フェイス侵害 (FTA) のストラテジーによるものであると考えられる。ブラウン・レヴィンソン (2011:291) によると、「オフ・レコード発話」とは、言語の間接的使用である。そのうち、省略は、自らの言いたいことを曖昧にすることで、聞き手のフェイスに敬意を払ったことになり、FTA を避けることができる。よって、モウの後にマイナス評価を与える表現が来る場合に省略が多用される傾向になり、それが次第に感動詞的なモウとして定着したと考えられる¹⁰。

7. 比較構文と共起するマダ

7 節では、比較構文と共起するマダについて考察する。Tanaka (2020) は、比較構文と

共起するマダには2つの読みがあると指摘している。1つは、(25a)のような「ある対象よりもさらに程度を上回る」という読みである「追加読み (additive reading)」(Tanaka 2020: 358)である。もう1つは、(25b)のような「ある対象よりも程度を上回るが、基準には至らない」という「不十分読み (not-enough reading)」(Tanaka 2020: 359)である。

- (25) a. 次郎は背が高い。しかし、太郎は次郎よりまだ背が高い。
b. 太郎は背が低い。しかし、太郎は次郎よりまだ背が高い。

どちらの読みのマダも、形容詞述語を焦点化する。そのため、マダは形容詞の導入する程度尺度を参照する。程度尺度について、Kennedy & McNally (2005) を基にまとめる。

初めに、形容詞文と比較構文の相違について考える。(26a)のように、形容詞文は対義語を用いた文を続けると矛盾するが、比較構文の場合は、(26b)のように対義語を用いた文を続けても矛盾とはならない。

- (26) a. #太郎は背が高い。しかし、太郎は背が低い。
b. 太郎は次郎より背が高い。しかし、実際のところ太郎は背が低い。

これは、形容詞の原形を用いた場合、文脈によって、「高い」とみなされる範囲を定める基準点 (standard degree) が設定されるため、「太郎の背の高さの程度は、ある基準を超えている」という意味となる。よって、(26a) は「太郎の背は『高い』の基準を超えているが、その基準を超えていない」という意味となり、矛盾が生じる。一方で、(26b) 場合は、太郎の背の高さと、次郎の背の高さの2つの程度を比較して、太郎のほうがその程度が勝っている、ということだけを述べるだけであり、基準点は考慮されない。そのため、「太郎の背の高さは次郎の背の高さを上回っているが、『高い』の基準を超えてない」という状況を記述することができる。

以上を踏まえて、マダの2つの読みを分析する。まず、追加読みは、マダの「A(p) & p < p_e」という前提から導かれる読みである。つまり、(25a) は、「背が高い」とみなされる領域に太郎と次郎の背の高さの程度が位置づけられるが、実際は太郎の背の高さの程度が上回っているという意味を表すことができる。図示すると図7となる。

一方、(25b) の不十分読みの場合は、移行点 p_0 の存在によって、「背が高い」の基準値が設定される。すなわち、「背が高い」領域があることが示唆される。そのうえで、比較構文の意味によって、「次郎の背の高さ」は、「太郎の背の高さ」よりさらに低い程度に位置付けられる。このことから、「太郎は次郎より背が高いが、太郎は『背が高い』基準値を下回る」という含意が導かれる。このことを図示すると、図8となる。図7と図8では、Kennedy & McNally (2005) に倣って、「高い」の基準点を $d_{s-height}$ として示した。

また、程度尺度を参照するため、移行点を d_0 、評価点を d_e とした。

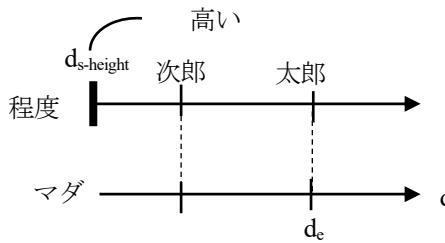


図 7 追加読み

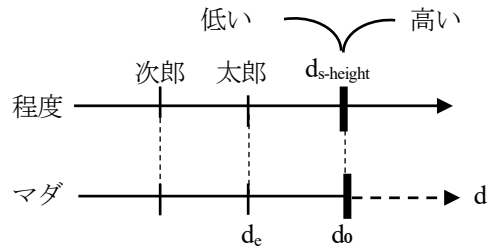


図 8 不十分読み

このことから、追加読みと不十分読みの2つの読みは、マダの意味において、「 $A(p) \& p < p_e$ 」という前提と、「 $\text{not-}A(p') \& p_e > p'$ 」という尺度含意と2つの要素から派生されると結論付けられる。追加読みは、前提に重点を置いた際に生まれる読みであり、不十分読みは、尺度含意に重点を置いた際に生まれる読みである。これは、マダの時間にかかわる用法において、「煙草を吸う」状態の継続を表す場合 (27a) と、「煙草をやめる」事態が未実現であることを表す場合 (27b) があることと並行的である。

- (27) a. やめろと言ったのに、太郎はまだ煙草を吸っている。
 b. やめろと言ったのに、太郎はまだ煙草をやめていない。

8. まとめ

本稿では、モウとマダの個々の用法が、モウとマダの焦点化部によって導入される尺度を基に新たな尺度構造を想定することで分析できることを示した。この分析の利点として、(28) に示すモウとマダの解釈が曖昧な文を簡潔に分析できるということが挙げられる¹¹。(28a) の場合、モウは時間にかかわる用法と、数量詞と共起する用法とで解釈が曖昧になる¹²。(28b) の場合、マダは時間にかかわる用法と、比較構文と共起する用法で曖昧になる。このような曖昧な用法は、文脈によってモウとマダの焦点化部が異なり、参照する尺度が異なると分析できる。

- (28) a. お前はあれからもう5杯もビールを飲んだのか？
 b. 小学生のころ、太郎は次郎よりまだ背が高かった。

また、その他の利点として、モウおよびマダと、他の言語の対応する副詞の相違点の分析が容易になることが挙げられる。Löbner (1989: 204) では、ドイツ語の *schon* および *noch* は、場所用法 (local use) を持つということを述べている。Löbner (1989: 204)

「何かしらの気持ちの高揚の中で語られる発話に現れる」と分析している。フィラーとしてのモウがどのような機能を持つのかについては、詳細な会話分析的な考察が必要であるので、本稿では扱わず、今後の課題とする。

- 2 'a < b'は、aがbに先行する時点であることを表し、'c ≤ d'はcがdに先行する、もしくはdと同時にある時点であることを表す。
- 3 日本語における段階性形容詞と非段階性形容詞の弁別は、Tsujiura (2001) を参考にした。
- 4 この基本的意味の想定は、他言語のモウとマダにあたる英語の *already*、*still* (Ippolito 2007) やドイツ語の *schon*、*noch* の分析 (Löbner 1989、Beck 2020) が *even* や *only* と同じ尺度副詞 (scalar adverb) として扱われることに着想を得たものである。
- 5 副詞の被修飾部の言語表現と参照する尺度の関係について、匿名査読者より、(i) のような例文に関して次のような指摘を受けた。(i) の場合マダの被修飾部は「10歳」という年齢であるが、実際参照する尺度は、「分別」にかかわるものである。そのため、マダの参照する尺度は被修飾部の言語表現から直接規定できない場合もある可能性がある。

(i) あの子はまだ10歳なんだから、そのくらいのいたずらは大目に見てやってもいいでしょう。

本稿では、(i) の場合、マダは3つの尺度がブレンドされた尺度を参照すると考える。1つ目は、分別の値に関する尺度である。2つ目は、年齢の尺度である。3つ目は、時間尺度である。3つの尺度は、単調的な写像関係を保っている。つまり、時間が進むにつれて年齢が上がり、ある年齢 (例として12歳) を境に分別がある基準値を超える。そして、(i) において、分別の尺度を参照する「あの子はまだ分別がないから」や、年齢の尺度を参照する「あの子はまだ12歳未満だから」ではなく、時間尺度を参照する「あの子はまだ (今現在) 10歳なんだから」という「10歳」を用いるのは、最も狭い幅を参照できる表現であるからだと考えられる。このような尺度のブレディングと、モウとマダの関係については、より詳細な分析を行う必要があるため、今後の課題とする。

- 6 金水 (2000: 16–17) ではこの段階を「準備的段階」としているが、結果相との対立として捉えるために、本稿では Comrie (1976: 64–65) の用いる “prospective” の訳にあたる「予期相」を採用した。
- 7 「E-S」は、「出来事時 E が発話時 S に先行する」ということを表す。また、「S,R」は、「発話時 S と参照時 R が同時である」ということを表す。
- 8 児玉 (2008: 44–45) は、数量詞に先行するモウは平板型のアクセント構造を持ち、かつ後続の語と音韻句として統合するのに対し、マダは音韻句を成さないと述べている。このような音韻の違いは、モウとマダの構成素性の違いを反映していると考えられる。

- 9 モウが単独で用いられる場合に、プラス評価を表すことがあるという現象は、匿名査読者から指摘をいただいた。
- 10 副詞単独で用いられる場合にマイナス評価を表すという現象は、「ちょっと」や「まったく」にも見られることが指摘されている（全 2015: 47-50, 76-77、裴 2017: 124-126）。FTA による省略によって、副詞単独の使用がマイナス評価を表すという分析は、これらの副詞にも応用できると考えられる。
- 11 (28a) の例文は、小野正弘氏の指摘から引用した。
- 12 註 8 でも言及したが、時間的用法のモウと数量詞と共起する用法のモウは音韻構造が異なるため、実際の音声発話においては音韻によって 2 つの用法を弁別できる。
- 13 (30) は町田市の属する都道府県が時間と共に変化したという文脈を与えれば時間にかかわる用法として解釈可能であるが、ここではその解釈を想定しない。

参考文献

- 池田英喜 (1999) 『もう』と『まだ』: 状態の移行を前提とする 2 つの副詞, 『阪大日本語研究』, 11, 19-35.
- 池田英喜 (2000) 「状態の移行前を表す『もう/まだ』について」, 『阪大日本語研究』, 12, 49-56.
- 柏木成章 (2005) 『『まだ』と『もう』』, 『大東文化大学紀要: 人文科学』, 43, 125-31.
- 金水敏 (2000) 「時の表現」, 金水敏, 沼田善子 & 工藤真由美, 『時・否定と取り立て』(1-92). 岩波書店.
- 小出慶一 (2017) 『『もう』はどのようにフィラーになったか —— フィラー化の経路とフィラーの機能 ——』, 『さいたま言語研究』, 1, 1-11.
- 児玉望 (2008) 「日本語副詞の構造的多義」, 『ありあけ: 熊本大学言語論集』, 7, 41-60.
- 蔡薰婕 (2017) 「尺度構造を用いた程度修飾・数量修飾の分析」, 『日本語の研究』, 13 (2), 18-34.
- 佐藤香織 (2004) 「イベント補部を量化する副詞的数量表現: 度数副詞と遊離数量詞の共通性」, 『日本語と日本文学』, 38, 15-23.
- 全紫蓮 (2015) 「現代日本語における副詞の意味と機能 —— 〈感動詞的用法〉の派生を中心に ——」, 博士論文, 大阪大学文学研究科.
- 仲本康一郎 (2008) 「予期の構造と言語理解」, 山梨正明編, 『認知言語学論考』, No. 8 (81-124). ひつじ書房.
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』, くろしお出版.
- 裴明文 (2017) 「日韓語の副詞終了文に対する対照研究: 副詞の感動詞的用法について」, 『北海道大学大学院文学研究科研究論集』, 17, 119-134.

- 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』, 東京堂出版.
- ペネロピ・ブラウン & スティーブン・C・レヴィンソン (2011) 『ポライトネス: 言語使用における、ある普遍現象』, 田中典子監訳, 研究社.
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』, 角川書店.
- 渡辺実 (2002) 『さすが! 日本語』, 筑摩書房.
- Beck, S. (2020) Readings of scalar particles: *Noch / Still*. *Linguistics and Philosophy*, 43(1), 1–67.
- Comrie, B. (1976) *Aspect: An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Ippolito, M. (2007) On the meaning of some focus-sensitive particles. *Natural Language Semantics*, 15(1), 1–34.
- Jacobsen, W. (1983) On the Aspectual Structure of the Adverbs *Mada* and *Moo*. *The Journal of the Association of Teachers of Japanese*, 18(2), 119–141.
- Kawashima, R. (1998) The Structure of Extended Nominal Phrases: The Scrambling of Numerals, Approximate Numerals, and Quantifiers in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics*, 7(1), 1–26.
- Kennedy, C., & McNally, L. (2005) Scale Structure, Degree Modification, and the Semantics of Gradable Predicates. *Language*, 81, 345–381.
- Löbner, S. (1987) Quantification as a Major Module of Natural Language Semantics. Studies in Discourse Representation and the Theory of Generalized Quantifiers, *Papers of the Fifth International Amsterdam Colloquium*, 209–241.
- Löbner, S. (1989) German *Schon-Erst-Noch*: An Integrated Analysis. *Linguistics and Philosophy*, 12, 167–212.
- Reichenbach, H. (1947) *Elements of symbolic logic*. New York: McMillan.
- Rooth, M. (1992) A theory of focus interpretation. *Natural Language Semantics*, 1, 75–116.
- Tanaka, E. (2020) Scalar Particles in Comparatives: A QUD Approach. In Kojima K. et al. (Eds.). *New Frontiers in Artificial Intelligence: JSAI-isAI International Workshops, JURISIN, AI-Biz, LENLS, Kansei-AI, Yokohama, Japan, November 10–12, 2019, Revised Selected Papers* (357–371), Cham, Switzerland: Springer Nature Switzerland AG.
- Tsujimura, N. (2001) Degree words and scalar structure in Japanese. *Lingua*, 111(1), 29–52.